

蒼君札箱鼓句集

上



5
1845
1

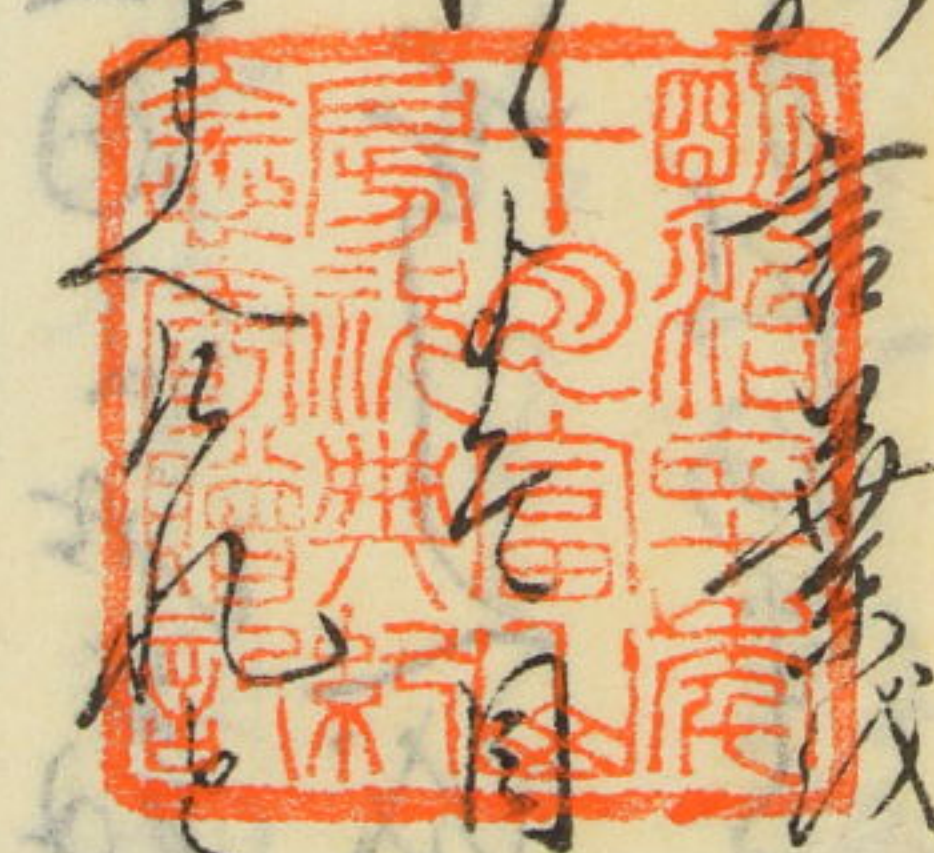
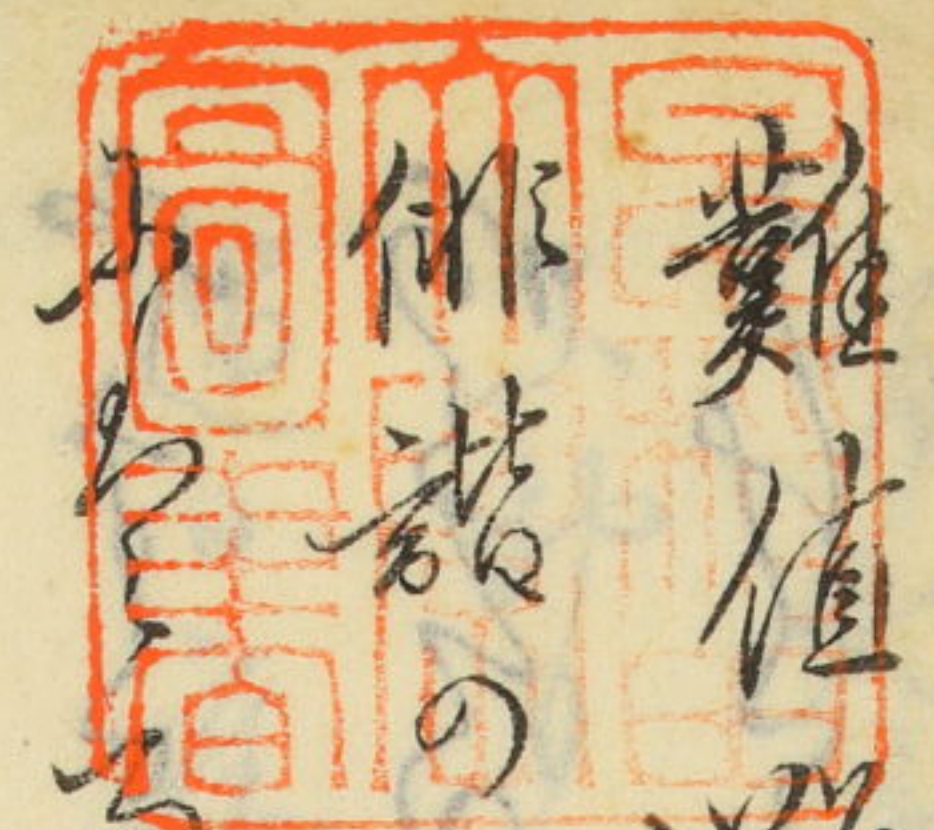


過日庵祖鄉輯

蒼君虬翁叢句集

江戸書林

青雲書林



難値難見難得難聞難
俳諧の道なり何ぞ以て
如わたり孝と笑ひて
祖為一家乃正風是より
能生りて此後ありて
心と志と其意を以て句
人す如之洛東芭蕉堂
叢句集

風羅の破巻を古紙を七の字にて帯
懸るれ杵の巻とのぬ標成雅号と也
一々抄の川とちちちとて此の句
連句とて生涯よくとての字を如
やまの山とてしよつと海田と世氣
何とてを去る歌と雅ををしと成
うげとて門生と名を如とて成
有夫老とて研平先とちとのぬ旅
ふ抄の巻紙とてとすくぬとて
過日爲和紳とてとすくぬとて
祥月忘平とてとすくぬとて
すくぬとてとすくぬとて
又居古の田友とてとせよとて
のらとてとすくぬとて

法も長生未暇学請学長不死と
いふ并成席に

為誰養由抄言

嘉永七年三月

必節堂外書



蒼朮翁發句集

過日庵祖郷撰

春之歌

雪あゆむ西自りしや強きく
葉の戸を左若く吹くも若き
ふ雪の末よりつらきと四方の
古稀の歌をこのまに
いふのつらきをこのまに

春

松子 248

多田の松 森のくく 暮る夕景
夕暮のくく 森のくく 暮る夕景
小松何くく かのや ちかよ 乃
何くく 西のくく くのくく 此
さよの志のくく 今くく 水邊の
ちかよ くのくく 古の人 往來の
あく 殊交 此のくく 園乃くく 古の
休くく くのくく かのくく 乃
暮る夕景のくく くのくく くのくく

暮る夕景のくく くのくく くのくく
大松のくく くのくく くのくく
松のくく 暮る夕景 乃くく 古の
くく かのくく 西のくく くのくく 此
さよの志のくく 今くく 水邊の
ちかよ くのくく 古の人 往來の
あく 殊交 此のくく 園乃くく 古の
休くく くのくく かのくく 乃
暮る夕景のくく くのくく くのくく
大松のくく くのくく くのくく
松のくく 暮る夕景 乃くく 古の
くく かのくく 西のくく くのくく 此
さよの志のくく 今くく 水邊の
ちかよ くのくく 古の人 往來の
あく 殊交 此のくく 園乃くく 古の
休くく くのくく かのくく 乃
暮る夕景のくく くのくく くのくく

春

一都の地志のついでに
蓬萊の志をくわへて
蓬萊の地志をくわへて
蓬萊の地志をくわへて
蓬萊の地志をくわへて
蓬萊の地志をくわへて
蓬萊の地志をくわへて
蓬萊の地志をくわへて
蓬萊の地志をくわへて
蓬萊の地志をくわへて

備中北玉島より

た若の娘とて知れり
ふとてはしる所あり
た若をよみて思ふは
よとてはしる所あり
た若をよみて思ふは
よとてはしる所あり
た若をよみて思ふは
よとてはしる所あり
た若をよみて思ふは
よとてはしる所あり

手ぬぐいぬい松屋わくわく茶 茶
茶ささくささくり雪の下茶 茶
大さくらの先ささくりわくわくみ
茶ささくしおささくもやささく
ささくささくささくや産の茶 茶
茶ささくや茶ささくささく
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく

ちよつと〜と煙をささくお松
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく
茶ささくささくささくささく

春の海は浅きことすなほおひひたり
 今下りて春の風はなかり春の水
 色は海の色
 春の海は浅きことすなほおひひたり
 今下りて春の風はなかり春の水
 色は海の色
 春の海は浅きことすなほおひひたり
 今下りて春の風はなかり春の水
 色は海の色

春の海は浅きことすなほおひひたり
 今下りて春の風はなかり春の水
 色は海の色
 春の海は浅きことすなほおひひたり
 今下りて春の風はなかり春の水
 色は海の色
 春の海は浅きことすなほおひひたり
 今下りて春の風はなかり春の水
 色は海の色

金田屋

蕞入や梅は枯り空を
 や梅入る冬は空に梅も枯れ
 蕞入の梅は枯るや 古
 中々聲の古葉の下は 梅の
 花の梅も空の聲よ 陸
 次第しつと 梅もや 四阿は 田の
 附木生を 田の梅も 空の
 品も 空の 梅も 空の 石部
 浦の梅も 空の 梅も 空の

鴨は 空の 山は 空の 梅も 空の
 梅の 聲も 空の 梅も 空の
 梅も 空の 梅も 空の 梅も 空の
 梅も 空の 梅も 空の 梅も 空の
 梅も 空の 梅も 空の 梅も 空の
 梅も 空の 梅も 空の 梅も 空の
 梅も 空の 梅も 空の 梅も 空の
 梅も 空の 梅も 空の 梅も 空の
 梅も 空の 梅も 空の 梅も 空の

縁たけくさるやむの表品もくうり
 人考やむの何とぬる石拾ひ
 さぬさむの下子星飛ちまこ小敷うぬ
 中の回笑来ぬくもたれふくや
 尾もけく飯喰ふゆりゆむ又成
 ふも来く志きくくもふ痛うれ
 痛後行も成く
 多たしきやむの表たひもぬる
 庵のま庭るるぬまののぬくや

白くもぬるののその修りのは
 縁たけくさるやむの表品もくうり
 人考やむの何とぬる石拾ひ
 さぬさむの下子星飛ちまこ小敷うぬ
 中の回笑来ぬくもたれふくや
 尾もけく飯喰ふゆりゆむ又成
 ふも来く志きくくもふ痛うれ
 痛後行も成く
 多たしきやむの表たひもぬる
 庵のま庭るるぬまののぬくや

岩山より

春のつととあつたや夕のまよと水
 日の輝ふく日そくおの輝りり春
 都のあすねくふ春のね尾まよと
 るくまのまをいこくふくまを
 ねくはなひ、おのめくくはを
 うくくく

春のつととあつたや夕のまよと水
 日の輝ふく日そくおの輝りり春
 都のあすねくふ春のね尾まよと
 るくまのまをいこくふくまを
 ねくはなひ、おのめくくはを
 うくくく

春のつととあつたや夕のまよと水
 日の輝ふく日そくおの輝りり春
 都のあすねくふ春のね尾まよと
 るくまのまをいこくふくまを
 ねくはなひ、おのめくくはを
 うくくく

岩山より

春

山水也 様や なる 兼乃 若
 上より 向の 晴く 雲戸のり 然ふ
 りの 妙も 心 安き 仁 足 幸 歩 行
 連 翹 の 葉 下 足 ぬ と 糸 の 時
 連 翹 の 葉 下 足 ぬ と 糸 の 時
 葉 の も の 成 河 へ ぬ り 也 松 の 陰
 葉 の も の 成 河 へ ぬ り 也 松 の 陰
 葉 の も の 成 河 へ ぬ り 也 松 の 陰
 葉 の も の 成 河 へ ぬ り 也 松 の 陰

ちよつ あり と 葉 影 のり の 毎 日 の 礼
 山 吹 也 井 邊 春 葉 社 云 と 志 不
 家 あり 山 吹 葉 也 押 乃 乃
 山 吹 葉 也 井 邊 春 葉 社 云 と 志 不
 葉 を 好 みる 人の 雲 晴 の 河 へ ぬ
 信 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 山 吹 葉 也 井 邊 春 葉 社 云 と 志 不
 ちよつ あり と 葉 影 のり の 毎 日 の 礼

春

春 葉 社 云 と 志 不

あひらの後原のつねの出来より

八十二歳自書

もよるに正しくあつての事

世の事をもつての事

の事をもつての事

とれりて大堰河の事

そとをたえん

りまの事

夏之節

和原の空界と

山をたて

は

去年の事より

あつて

おまを告

扶とく

み〜の和と思を〜〜黄紙川
志〜〜けふ橋の橋白也 文 衣
孫 ぬき〜法序ふも〜や 兼の兼
花此堂ハ殿法里人 是云々り
法佛 也 聖のま〜〜時 在
を 志 存 也 夫婦の中も 是の和魚
ぬ〜りりハ 即 猶 法 何〜 郭 公
蓮生の和の 矢き〜や 亦〜きん
時 高 時 ぬのるを 是〜〜り

此や〜〜〜 兼 兼 兼 也 杜 宇
一 堂 志 存 也 法 何 何 何 何
郭 公 時 也 和 何 何 何 何
兼 つき ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
筋 達 不 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼
踏 付 一 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼
る 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼
蜀 魏 中 何 何 何 何 何 何 何
その 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼

有るはさき原付一のぬるる葉の
晴きくもるよりわくの葉の葉の家
高先子一住るるよりわくの葉の家

三介のトあを録し

是樹人よりよりわ戦き一のぬ
鐘佐書信のさくわいの樹
我産くあよりわのりりる樹
右井ぬる人の歌をさくる樹
その樹を時よりるのわくさくさく

この月のあよりるのさくさく樹の
あよりるのさくさく小村の樹の
のさくさくさくさく新垣の樹の
和のさくさくさくさくや垣の帯
和のさくさくさくさくは小家
さくさくさくさくさくさくさく
おのさくさくさくさくさくさく
一里おく先くのさくさくさくさく

紫陽花や海知くらす洲の上
 阿比の浦も同じく春さるる山
 紫陽花や海知くらす洲の上
 あらまゝおぼゆるふと春さるる
 乃合わくはるる春さるる
 紫陽花の浦も同じく春さるる
 海河まぬる春さるる
 空豆のまゝおぼゆるふと春さるる
 春梅や白の浦も同じく春さるる

州のまゝや牡丹も同じく春さるる
 紫陽花の浦も同じく春さるる
 夕暮の浦も同じく春さるる
 飯粒や海知くらす洲の上
 旅人おぼゆるふと春さるる
 燃ゆる飯粒も同じく春さるる
 飯粒のまゝおぼゆるふと春さるる
 夕暮の浦も同じく春さるる
 飯粒のまゝおぼゆるふと春さるる
 飯粒のまゝおぼゆるふと春さるる

夏

旅人此其のけ 柳々り 塚の考
のんあゝくく 入るま 甲の如

山本乃 露多り 和孫を 終く

ゆくのぬるま 田の中 やま 集り

屋敷の 志 崎の 孫の けり けり

らゝこの 屋敷 一 名 けり せま 元 新

夕 雲 や 多 けり 入 多 けり 多 けり

夕 雲 如 上 子 けり けり けり けり けり

ゆくの 志 崎 孫 けり けり けり けり けり

凌雲 七 名 多 けり けり けり けり けり

楳子 多 けり けり けり けり けり けり

六月 中 待 けり けり けり けり けり

日 暮 けり けり けり けり けり けり

冬 けり けり けり けり けり けり

夏 けり けり けり けり けり けり

麻 けり けり けり けり けり けり

里 人 の ち けり けり けり けり けり

一 文 の 葉 子 けり けり けり けり けり

志あるのしきこののほくたき見たり
 常とれあり合せたり運のふ
 繰くのけき城子ささく運のれ
 裸身や空船をしあのをさしり
 大水のさく中川さくや空船
 江戸城ささくさくのさ空船
 ささく空船さく大さくをさ
 船ささくさく空船をさ
 とさくさく空船をさ

山さくさく河さくさくさく空船
 暑さくさくさく城さくさくさく
 船さくさく人さくさく空船
 空船さくさく空船さくさくさく
 あくさくさくさくさくさくさく
 さくさく空船さくさくさくさく
 空船さくさく空船さくさくさく
 さくさくさく空船さくさくさく
 さくさくさく空船さくさくさく

おまふる葉せし一担也一	相つ葉ちる也葉の起ぬるも	時をぬくやももくのた浪のむ	妻は種伸くくもむの他	家ゆきさりのくはく高の梅	降止くもををまの葉の	考やき一梅のまこ人もあも	以ぬあまぬまのうもりまの	牙綴のりくももくのたの	とれまほの梅くもほし
九起	鳥谷	猿錦	芳英	文海	自坡	可大	然他	大葉	高

鶯あまゆりおの葉か	ハ新や梅のくは河津の	とくこのふ人のよもも天の川	梅咲や梅の雪さくく	思もりのけあも新も相一葉	お果く星の月屋も紀云井	おくもけはたもくはく折
鳥左	林曹	白鶴	松隣	蟻兒	古乙	曲昇

とくもほやけゆく隙を嘆星は 稻妻
長生は人をもつての谷の梅 杜鵑
燈籠よきまらうそくくしつ折 素履

雲雀さく新の生屋や笠の上 雲那

しるものもまねておとしや初松魚 九葉
眼もまらう芳はらんゆら荒勢は 月穂

濃結やよきもの入る芳のけ 葦園

大曲のけきも持てる田植や 産丸
梅柳茂る中へぬりき 燈臺
夕空は何れやうきそきそふ 鳥曉

山雀の踏くゆらも如柳は少 守匠

五月のやめぬきやたぬきの蝶 雲葉
一葉のぬきりうきゆき子もや 斗文

流るるもゆきくのれるは子もや 飛木
流るるもゆきくのれるは子もや 鳥夕

鶴のぬきりうきゆき子もや 木高

梅うまやあし直しく一眠り
松坡
明く秋のまきくく産の梅うれ
乙國
新く山をうくしき葉のむ
向星

幕の使んえりり梅り
悠く

分く水に梅あり葉の苗
双鳥

ふりふりれ向く梅り
出徑

苗より水をうく死枯梅
突水

梅植の移り種子出く三日の自
林鳥

夏葉やあしをうくあき葉
純岳

梅うまやあし直しく一眠り
風棲

梅の向くやつをうく梅のむ
乃

見跡くく葉は伸く彼岩の
平葉

おもしろく新葉あるや月の梅
大夢

初葉やあし直しく一眠り
思を

家島の梅り来りく雲の時
春葉

容易より葉をうく秋の梅り
葉陽

笑ひ聲あしりく梅り小葉陽
葉像

星河をくぐりてく波の子をく
 赤く浪を際をたもつを磯の雪
 待人の来さうれ萩の戦さうれ
 月あし一州をのつれ人由り
 さか娘や柿の葉のそとを
 海苔垣をさ波志るを萩の
 一町の海をさるる如松の
 帷子や蓑を垂るの心地を
 義うけは夕雲の岩をく

山梨
 羽書
 赤岳
 一帰
 月古
 蘇村
 赤雲
 古岳
 雲友

水の音を想ふは跡も松尾を
 二三の宿の跡は伸しつり
 今折れをさう秋をの志をり
 物やのつらふれ道入に
 一町をさうはゆる田植のれ
 秋の序をりをさるのやうを
 所はをさる月夜の出る秋の
 子のや二三の宿の白とをさり
 心はさうあはれ大根の門

好年
 松屋
 智作
 雲夕
 梅十
 月夜
 元史
 琴島
 清原

ふりふり生衣の足中折る丸 一物

ふいのり子素とみやまのまこ 碓氷

ふりのふり又素とみやまのまこ 雲洲

懐ふり女素とみやまのまこ 雲途

碓氷のふり女素とみやまのまこ 入雄

碓氷のふり女素とみやまのまこ 五粒

ふりふり月のふり女素とみやまのまこ 雲白

細き子婦 女素とみやまのまこ 雨石

秋立や吹物子素とみやまのまこ 茨山

ふりふり秋のふり女素とみやまのまこ 李嶽

懐ふりふり女素とみやまのまこ 烏津

袖ふりふり女素とみやまのまこ 梅組

ふりふり女素とみやまのまこ 一尾

湯汁のふり女素とみやまのまこ 雀皮

恒あふり女素とみやまのまこ 月庭

陽炎や佛の如きの葉一杯
 埃揚や羽の隙のちたぬい
 樽の深や垣の外はあは味ま度
 日に向ぬ心はあつたあつん
 夕ふきうといふまゝの秋の情
 春の心や海をもまある破れ
 空あつてはあつた山はあつた
 井子まはるおの人の表は
 時よの樹のあつた果た
 葉砂

貴方の雲はまをまのむ
 人あつたあつたあつたあつた
 伸きあつたあつたあつたあつた
 蹴おつたあつたあつたあつた
 夕ふきのあつたあつたあつた
 春の心や海をもまある破れ
 空あつてはあつた山はあつた
 井子まはるおの人の表は
 時よの樹のあつた果た
 葉砂

立字
 凡和
 葉草
 尺若
 清靖
 之徳
 其例
 吳丁
 葉砂
 可合
 布史
 双折
 三折
 雲葉
 埃揚
 雅然
 春草
 事如

<p> 心ゆく一節をせきすの陣 情やうらみの如くを下りたり 梅うらやまこ月の如く静けけ ぬつき一蝶ふりやうらむ 山嵐おむり向ふかきうの歌 是れらたりの照りあう好の酒 精進の猶も子の心も静けけ 子乙女や歌はるるを笑に聲 叢入る雪はけけの子はるる きの秋や都へはるるの節のあ </p>	<p> 竹巻 尺地 清水 蟻走 流石 好詩 素兒 今哉 深山 きのり </p>
---	--

<p> きのむらゆり情うらむるる 是れはるるちみ静けけをの歌 葉ふらも静けけ静けけ 露もむらや静けけ静けけ 梅うらまゆ平や静けけ静けけ きのりの秋の月静けけ静けけ 秋涼し紅葉も静けけ静けけ 静けけ静けけ静けけ静けけ 晴曇りくく眼のりや静けけ </p>	<p> 李韻 古堂 空如 五言 深古 文華 篤之 有冲 忠号 </p>
---	---

涼しきの秋くも遠くは青き空	定番
子龍の子孫を無きとすも	夢里
人の来く垣をぬりて月見や	暮山
古河や水澄まるとくも	榮盛
何となく町は静かや	慈光
あつちや伸も掛りて	相裁
招くもくは代りて	相芽
往來も人の向ふは掛りて	作幽
山は静かや	十三
案のり掛りて	素水

一層の月や	秋のちり	休高
何となく	一さあ	算介
庵の戸を	舞のむ	柳春
文をり	空のあ	大夢
舞をす	ふや	晴江
庵をす	也十	車史
衆の戸を	某素	丹岩
初秋や	足雨の	江波

初を此の遊園の車に招致か	本公
燈水に沙流れは出まるとは	後来
明く日影を交えり雲の影を	梅嶺
よふ空ふもたむ雲霞の影を	心屋
第一ふ子伸くつる産の葉の丸	和月
捲く来し子の影外や露の玉	桐晴
十六夜や露の影の影の影	築市
築糸の影をぬき夕の影	布山
かゝる影の影をぬき夕の影	琴堂
縁物に影をぬき夕の影	朱室

ゆつりたる影の影の影	文堂
影の影の影の影の影	友松
影の影の影の影の影	錦袋
影の影の影の影の影	梅枝
影の影の影の影の影	昌海
影の影の影の影の影	一峰
影の影の影の影の影	住山
影の影の影の影の影	和彦
影の影の影の影の影	茂精

春あきくまのまきり海のぬ	梅	山
樹ふくつらね新様さる茶うれ	梅	谷
河あきおやむの津もさる茶	茶	室
秋のやも声りすけりあはるる	抱	江
次つとせは後寂りたつてあは	和	菊
自屋もさかぬに居るは秋の聲	夕	和
茶候や秋候あはるる茶うり	和	折
あきゆくや思ふがさる茶候あは	香	河
茶本もさる茶うりあはるる汁	大	蟻
おけよあき菊の秋やあきの自	貝	蟹

梅あきくまのまきり海のぬ	菊	茶
日あきくまのまきり海のぬ	友	甫
茶候や秋候あはるる茶うり	十	歳
あきゆくや思ふがさる茶候あは	岩	塚
茶本もさる茶うりあはるる汁	黄	塚
おけよあき菊の秋やあきの自	周	眉
梅あきくまのまきり海のぬ	其	山
日あきくまのまきり海のぬ	宿	山
茶候や秋候あはるる茶うり	香	山

足跡をたづねて	あつりやむの跡をたづね	あつり
なつりぬと人の心を	たづねぬ	清民
招きよすを	たづねぬ	雲山
木のうらとをうらぬ	あはれむのうら	杜山
日を送るを	たづねぬ	善也
舟や空のり	たづねぬ	佛孫
舟舟人の心を	たづねぬ	由人
舟舟人の心を	たづねぬ	善也
舟舟人の心を	たづねぬ	善也

陵の森ふつ	たづねぬ	病
入梅ふんの	たづねぬ	市山
投りぬ	たづねぬ	船山
山をふや	たづねぬ	舟
舟の心を	たづねぬ	三生
舟人の心を	たづねぬ	一橋
舟の心を	たづねぬ	色山
舟の心を	たづねぬ	美山
舟の心を	たづねぬ	如松
舟の心を	たづねぬ	梅二

文月や山根の竹のよきまきと
ゆれまのう蝶は長島か掛字
船をゆく尾上の鐘や歌公
空清くゆく西白やゆく蝶
船をゆくまふ渡りゆく望月
新月や水も新めの女房出
夕暮も出の末はるる落ぬり
月もまよふ小島入りの念仏
掃紗は松葉の上で日の光
舟上りふも志すむまのりし

精筈 可應 桐只 崎女 芝燈 松蔭 松出 暮こ 鴉曉 好會

松蔭も亦も暮を死す 松
ゆれまのう蝶は長島か掛字
船をゆく尾上の鐘や歌公
空清くゆく西白やゆく蝶
船をゆくまふ渡りゆく望月
新月や水も新めの女房出
夕暮も出の末はるる落ぬり
月もまよふ小島入りの念仏
掃紗は松葉の上で日の光
舟上りふも志すむまのりし

井南 空手 淡溪 中谷 里水 隼雄 桂留 茶三 喜高 香山

白近き階の屋敷をむかへるのむ 三糸
 ちりちりしるほのせしほや葉はむく 左乙
 お仕舞の砦や川の香汁の 芦葉
 書案きや振子あがりお麦の香 浪鼓
 何と船の幾度もゆりや竹の露 鶴尾
 何と春の遠方よゆりやまうりく 花好
 秋のや晴るるしるる、山さへ 光石
 ちりちりあつた境の遠き香のむ 岩肌
 白きりの香や振子中のとふ 英泉
 家何りとつるるるるや振子のむ 東里

松のこれ雪の招海きよの白のむ 丁酉
 船のしるも振子よ、しるる二月の 夷暮
 夕島やをりしき家の葉言を 理周
 坂口や山さへ、色一のむく振 暮也
 家出ると振子く甲の小屋の 大費
 機幅のゆりや振子く、しるる 小亭
 舟の舟のゆり、しるる、の白言の 西英
 起きぬく船載を屋敷振子む 直樹
 ちりちりしるる、しるる、の白言の 梅月
 吹安きし新敷や、ちりちり、 遊阿

新のそとくあまの居りけき月の	江三
今出くは向ふなるを	詠折
あはれもて裁くまゝにわし人	梅家
あまの候くあまをきく雪の降	左竹
降定ときくあまを植まら	梅舟
きけよよとえく雪屋きをふの	心何
移のわきまきりたの納す人	来月
水子のこゝろ新のゆるる雲の	立雪
山葉もや候とちこゝの眼より	白水
雪降る候よあまの候り	水立

あまのまのわら念のほし雪接子	雪巻
あはれおし入はり浮ぶまの雪	一止
候くくけりくあまの老なり	物芽
降生も毎のく雪のあがり	宗古
あまのきく雪より空を他の候	木山女
あまのまのあまの雪よひま	三島女
あまのまの雪のあまのあ	長洋
あまのまの雪のあまのあ	梅家
あまのまの雪のあまのあ	如雲
あまのまの雪のあまのあ	金用

舟の楫 糸あなれくよあひたり	未
ら枝の涼 葉まのつゆく涼のむ	木
佳しき中 木より秋のま安が	巴
よひ春のときり日物や落し水	葉
雲の影いさなりは秋のる	石
雲の山をく見たりむと雲	柳
雲晴くは雲のまより目ん	未
人知くあくよりのぬるの子	蒼
雲形を掃ぬらるる葉葉	新
舟は秋煙くくくや葉	三
	川

川は秋のまよりあはれ	一
降中一のぬる木中女春のる	赤
秋葉を木のまより白の秋	赤
ゆきんくむのおろき舟のま	可
舟より持石を掃る葉	礼
木の根のまよりまはると死	田
踏るぬら山をまよりあはれ	葉
秋のまよりまはると死	葉
舟は秋煙くくくや葉	葉
舟は秋煙くくくや葉	葉
舟は秋煙くくくや葉	葉

川筋のあり如くありのあり 作場

霧の城也人よ志く死の死り	芦川
和屋も其のけしきもわむの桑	全屋
庭もあうう見る程に女者の色	若葉
夢うらむをいづくもあそむる柳下	吉甫
蝶は来々秋の夕葉静かた	正古
馬は去く旅より終るあつさ	里野
いりたを嘆くもあそむる人	規友
岩若り水吸ひの今般の好	重高

柳も此をりあり秋の梅	一二
正益の月やと膏は純きあり	可災
いづくもくをくその足るまの色	立高
あゆむもさそむるもあそむる	寛之
耳もつづの梅はあそむる	其云
常もいづくの梅はあそむる	水鱗
海もいづくの梅はあそむる	車陸
いづくも梅をたも田の梅は	菊江
梅もいづくの梅はあそむる	葵三
春のあそむるをいづくの梅	春昌

終りのく秋のゆきふる塔山丸	翠丹
為子らるる家娘ハをく花の聲	三帛
をく口のむふかきく楳の南	冬月
其跡る落葉のりる女秋の句	南溪
秋あおけおのよきと女秋の句	吐月
句屋あつたてくく落葉の句	耕山
度重なるくく女秋の句	函志
落葉のくく秋の動く女秋の句	李浦
叶句せ秋のくく女秋の句	吹雪
山吹のきく雨のた落葉の句	露文

きたりり人をくく女秋の句	観之
日の重なるくく女秋の句	川古
よの重なるくく女秋の句	叶句
水も花付くく日の重なる	頂水
降出くく女秋の句	岳雲
る上のりく女秋の句	素里
山も花付くく女秋の句	圃柳
如き如く花付くく女秋の句	五篇
折りゆく女秋の句	交泰
露のくく女秋の句	玄く

福寿多子ふさふさくくくく 暎きき 希石

おもしろくこの世をくくくくくく 雨先

人持ふもくくくくくくくく 旭

魂棚のくくくくくくくく 耕雪

押さけくくくくくくくく 洪翠

くくくくくくくくくくくく 委文

柴井戸の類ききくくくくく 南本

常く葉の似たりくくくくく 秋芝

痛くくくくくくくくくく 一折

秋まや山越くくくくくく 此末

枯ぬくくくくくくくくく 一翫

一二本おろくくくくくく 一痛

おもしろくくくくくくくく かせ成

水着のゆのくくくくくく 孝節

葉搦や夕暮るくくくくく 枝雲

来くくくくくくくくくく 函権

おもしろくくくくくくくく 揚月

産子の類きくくくくくく 楳岩

水あか鳥のくくくくくく 帰山

船を曳くもくわく水は星の影 一 帆
 樹の影は樹と交りて暮の影 向 梳
 河の影は流れてゆく水の本の影 可 丈
 月影はくわく小波はくわく小波の影 里 江
 一輝の影はくわく出て月影はくわく 如 隙
 戸をくわくくわく伏草はくわくくわくの月 翳 く
 ふたはくわくくわくくわくくわくの月 二 葉
 移りゆく影はくわくくわくくわくの月 暮 峰
 影をくわくくわくくわくくわくの月 已 有
 清き水はくわくくわくくわくの月 猶 高

雲を横切る影はくわくくわくの月影 暮 月
 くわくくわくくわくくわくの月影 雲 交
 葉の影はくわくくわくくわくの月影 暮 所
 暮る影はくわくくわくくわくの月影 暮 人
 影はくわくくわくくわくくわくの月影 砂 山
 影はくわくくわくくわくくわくの月影 化 活
 影はくわくくわくくわくくわくの月影 希 交
 影はくわくくわくくわくくわくの月影 新 交
 影はくわくくわくくわくくわくの月影 暮 歌

此日和合よき 待て 縁 如 三 函
 枯草や日の暮ゆく水明り 万葉
 若草の連ふ海も花散る 出づ
 しのしのとけしけし月のお空に 雲霞
 増敷を足さるるを 秋あきのの聲 庭子
 みづの根や木元は 橋の人をさる 湖月
 子のおとけのうねや友の月 是石
 名月やまこと 秋のつら 鏡の音 如海
 初秋や雲の吹きたる 向のあき 暁年

初めうらやま 縁めさるるるる
 坂をふり下りて 秋あき尾むい 松原
 芦は青くやうきも 冬はむすむすの表 三子此
 晴るるる 雪るるる ぬるるるの空 寒く
 我のさるるる 月をた 志云
 空は青くやうきも 秋あき尾むい 梅原
 身志守の鏡の光や雪の峰 片れ女
 空あきうらやま 秋あき尾むい 月形
 人さるる 秋あき尾むい 鹿文
 若柳や 秋あき尾むい 人のさるるる かりん

席杖の端を境子くねる

茅久

松のうらみきくはらうは月影

漢山

まゝくおと月のうらみは海ら山

水曜

秋の月影うらみは海ら山

香古

先鋒のやぶの山家のをけり

把柳

少く坂子まきのさくらうらみは

三千丸

まゝくおと月のうらみは海ら山

葉菊

和装のやぶの山家のをけり

和好

